

『就実論叢』 第五二号 抜刷
就実大学・就実短期大学 二〇二三年二月二八日 発行

短歌「添削」指導考（三）

——与謝野寛・晶子の添削指導例、寛と高村光太郎——

加藤美奈子

短歌「添削」指導考(三)

——与謝野寛・晶子の添削指導例、寛と高村光太郎——

加藤 美奈子 (生活実践科学科)

一 はじめに—加藤守雄『わが師 折口信夫』、「現代」短歌

前稿においては、近代の歌人、特に与謝野晶子による「添削指導」の例を挙げ、歌人の添削がときに添削者自身の創作意図により、詠み手の意図によらず一首として成立せしめる場合のあることに言及した^(注1)。晶子は、「俗情」を排斥し、「人格の向上」を創作に求めた^(注2)が、釈道空・折口信夫の「歌会」での指導はさらに求道的なものであったようだ。

「とりふね社」は、毎月一回歌会を開いていたが、近頃(引用者注—昭和一八年頃)は会場がさがしくくなって、国学院大学の教室を借りたり、先生の家を集ったりすることが多くなっ

た。

普通は、高点を得た作者は大いばりでいられるのだが、「とりふね社」では、逆だった。高点の作者は、先輩連から大衆作家とさんざんにやつつけられ、その上、先生から致命的な痛棒をくらわされる。言われて見れば、態度が甘かったり、はつたりが見えたり、技巧でごま化していることに気附く。作者はもちろん、その作品に点を入れた者まで、いたたまれない思いになる。

だから、自分の歌が高点に選ばれていると、それだけで絶望的になった。折口先生の批評は、二、三分の短いものだが、歌の中にかくされた、われわれの秘密——心の秘密も生活の秘密も、容赦なくえぐりだして、きびしい鞭がとぶ。恥しさに、顔

もあげられないことが、しばしばあった。

歌を作って、たのしむ気持ちなど、私はいちどだって味わったことがない。^(注3)

加藤守雄は長く折口に師事したが、師弟関係には感情の相克があった。回想録である同書の記述を全て事実とすることはできないが、折口の指導姿勢、戦時下にあっても開催されていた「歌会」の場の雰囲気は伝えている。「歌が高点に選ばれ」と、「大衆作家」(引用中の傍線は稿者による。以下同断)と批判されるのは、当時としても特異な厳しい状況であったことが思われる。折口の短歌の指導は、「心の秘密も生活の秘密も、容赦なくえぐ」られるものであり、ここでも詩歌の創作が「心」と「生活」、「人格」に関わるものであることが自明のものとして理解されている。「たのしむ気持ち」が優先される現代の創作の場にあつては、弟子の「心」を「えぐりだす、このような指導は容易には成立し得ないであろう。

また、この回想においては、「互選」の実際に言及されている点でも興味深い。匿名により「互選」し講評しあうことは歌会では一般的だが、わかりやすく「共感」を得やすい作品が選ばれる傾向にあり、「大衆作家」という批判は極端な例だとしても、「高点を得た作者」が「大いばり」となるような「楽しい」歌会は、読み手に迎合しようとする「俗情」に陥る可能性と表裏であろう。

折口の添削指導の一端は、以下のように回想されている。

毎年そうした歌を集めて、『とりふね集』という合同歌集が編まれていた。全員が五十首ずつ自選して提出し、それに先生が目を通して、選ばれる。(略)二度、三度、歌を提出し直させたり、生かし得る歌には手を加えられた。

ともかくも、五十名近い「とりふね」会員全部の歌稿に目を通し、載録歌のほとんどに朱筆を入れられる。極端に言えば、全部先生が作り直しているようなものだ。^(注4)

合同歌集が自選からの指導者の選歌、添削が施されたものであったことがわかる。折口の指導は厳しく綿密なものであったが、緒言を指導者が付し、「全部先生が作り直している」かのような歌集の刊行は、結社の歌集においては現在でも珍しいことではない。

一方で、現代の創作短歌においては、「オリジナル」であることが求められ、添削する側にも「たとえ稚拙であっても、それを生かすようにする」「全体的に意味がわかれば、大きく作り直さない」姿勢が求められる。^(注5)

過日、現代歌人・木下龍也がドキュメンタリー番組「情熱大陸」で紹介されていた。^(注6)同サイトに紹介される「PROFILE」には、旧来の「結社」も指導者もなく、詩人・谷川俊太郎との対談・作品への好意的な講評の他、番組には、詠み手と読者との「共感」によってのみ成立する言葉の応酬が主軸として描かれている。歌人による

入門書『天才による凡人のための短歌教室』(二〇二〇年)には、「インストールしてほしい」「メジャー」として「穂村弘」、「王道」として「吉川宏志」が挙げられている^(注7)が、古典和歌・近代歌人の名前はなく、この歌人による現代「短歌」は、もはや一切の伝統、しがらみと規矩から解放された場所で支持されているのである。第二歌集『きみを嫌いな奴はクズだよ』(二〇一六年)のタイトルに象徴されるような、読者への寄り添い・励ましを主題とした作品を、「あなたのための短歌一首」として「購入者からメールで届くお題で短歌をつくり(略)封筒で送る」という「短歌の個人販売プロジェクト」を実施している。同番組によれば、「一首税込み一一〇〇〇円で五〇〇首ほどが「販売」されたという。「大衆作家」という批判は、この歌人にとってはもはや褒詞であろうが、歌を詠むことを「楽しいと思ったことはない」と答えていることは、加藤守雄の回想と重なる。

折口の弟子で養子でもあった歌人・折口春洋は以下のように述べたという。

「歌の宗匠をしたって食えるから」

自嘲のことばではない。歌に対する春洋さんの自信が、そう言わせたのだろう。(略)それにしても、宗匠と言うことばには、さびしい諦めが感じられる。春洋さんは、わたしたちが文学々とさわぐのを、抽象的な理論の遊びとして嫌っていたから、わ

ざとそんなことばを使ったのだろうか。(前掲同、一七〜一八頁)

前稿でも指摘したように^(注8)、近代短歌の革新運動は、「宗匠主義」の否定に立脚していたが、春洋は、「文学」としての「抽象的な理論」を嫌う一方、歌を「食える」ようになるための手段として、短歌を指導しなければならない「歌の宗匠」として生きることは「諦め」によらなければならなかった。

香川県で「令和相聞歌」を公募するポスターを目にした。「愛する人や恋人への想いなどを、形式にとらわれずに自由に表現してください。字数は80字以内とします」とあるが、前年度の「最優秀賞」は短歌形式の作品である。選歌の方法が、「1次選考通過作品(50点程度)をサイトに掲載」し、「サイト上で人気投票を行い、その結果を考慮したうえで最終選考を行います」とあるように、「人気投票」による選考が実施されている。^(注9)先の「情熱大陸」のサイトに「五・七・五・七・七の31音の短い調べはSNSとの相性もよく」と紹介されているように、「人気投票」により作品の優劣が決するのであれば、確かに「SNSとの相性」はよいのである。だが、先の「令和相聞歌」も、「人気投票」を「考慮したうえで最終選考」を実施するとして、俳人・歌人・和歌研究者の「選考委員」の紹介を掲載している。「人気」のある作品が必ずしも秀作でないことは、創作の現場では屢々実感することである。

本稿においては、前稿につづき、近代歌人・与謝野晶子らによる短歌の添削指導の実例を示す。「現代短歌」との隔絶を思う一方、新たな創作指導に繋がる可能性を稿者は見出せないかと考えている。

二 与謝野寛・晶子の「添削」指導―堺市博物館所蔵 自筆原稿

堺市博物館編『「明星」創刊120年・「冬柏」創刊90年記念 企画展

「『冬柏』―『明星』の精神を貫いた理想郷―」（堺市博物館、令和二年二月五日）に掲載された、堺市博物館所蔵、与謝野寛・晶子添削による自筆原稿により、添削指導の具体例を示す。^{〔注10〕}

「寛と晶子の朱字で書かれた添削指導」として以下の原稿がある。

「晶子・寛添削、丹羽俊彦原稿 年代不明」

◎紫の夏丹前は宗全の籠に挿したるアカマパンスカ

著述、何れも歌人臭なくて、新味をほのかながら感じ、大に驚き申し候。この調子にて表皮を去り、中の珠玉を追々にお見せ

下され度候。寛 晶子

晶子との連名による評だが、手跡は寛であるように見受けられる。「歌人臭」を忌避し、「新味」を重視していることが伝わる評言だが、

作品への添削はなく、二重圏点が添えられている例である。総評にとどまり、「宗全籠」といった茶人好みの趣向や、アカマパンスといった洋花の呼称には批判も評価もされていない。

「晶子添削、小金井喜美子原稿『丹後詠草』昭和12年（1937）」

◎断崖のつ、じ山藤色そへぬ丹後の由良の紺青の海

日と風に沖は金色銀色す汀は藍の濃淡のいろ

色見本のやうにもと 思はれる

◎由良港袖ぬる、かな語りつぐ人質船のよりしはいづこ

いとあはれなり

「小金井喜美子^{〔注11〕}「丹後詠草」「冬柏」第8巻第6号 昭和12年（1937）6月」では、「添削の歌の上に朱書きで「m」字状の三重丸が付けられた歌だけを掲載している」^{〔注12〕}

断崖のつっじ山藤色そへぬ丹後の由良の紺青の海

由良港いとあはれなり語りつぐ人質船のよりしはいづこ

『冬柏』においては、三重圏点の施された歌を残し、晶子の添削により修正した作品を掲載している。圏点がなく、「色見本のやう」と批判されている一首は除かれている。

「晶子添削、丹羽安喜子」^(注13) 原稿「うつぼ草」昭和12年(1937)

七月よりの雑詠 丹羽安喜子

◎うつぼ草少しの風におのゝきて紫散らす七月の山
を 山荘の土

◎霧こむるまの朝莊の古松にほととぎす来て高声に啼く
なり 高 はやりか

仮名遣いの修正の他、「七月の山」を「山荘の土」と、「紫」との色彩の対比・描写が生きるよう表現を変えている。また、「高声に」が歌語としてはなじみにくいためか、「はやりか」としている。

「丹羽安喜子」「うつぼ草」『冬栢』第8巻第9号 昭和12年(1937) 9月」には以下のように掲載されている。

うつぼ草 丹羽安喜子

うつぼ草少しの風をののきて紫散らす山荘の土

霧こむる朝なり莊の高松にほととぎす来てはりやかに啼く

いずれも三重圏点の歌であり、晶子の添削後の表現で掲載されている。結社においては、指導者の選歌・添削により機関誌に載せる

ことは一般的であったことが改めて確認できる。

また、「歌人臭」のないことを寛が評価していることも興味深い。旧稿^(注14)において、「小日山直登(満鉄総裁)」^(注15)への寛の自筆添削原稿を紹介したが、小日山の歌集『黄塵』(昭和六年)の「黄塵序」においても、寛は「君の歌に現れた誠実と雅懐とを尊敬し、併せて其の専門歌人臭の無いのを喜んだ」と評価している。^(注16)

前述の加藤守雄は、「身についた粉飾が捨て切れない」ことに停滞し、「愚直になることだけが、私たちの目標だった」と回想している^(注17)。「専門歌人」特有の粉飾や技巧を忌避し、「誠実」を作品に求める姿勢は、表現が「人格」と関わっていると信じられた時代らしい評価のあり方である。

三 与謝野寛と高村光太郎―「添削」指導をめぐる

前稿の末尾において、斎藤茂吉と与謝野鉄幹の添削をめぐる対談の発言内容・評価に疑義のあることにふれた^(注18)。

茂吉の添削は思った以上にあっさりしてますね。一箇所直すと、
ここもここも次々に出てくるんですよ。そういうところを触
らないで、一箇所だけ直して、人を傷つけない。私(引用者注
―歌人・小池光)が聞いたなかで一番すごい添削は与謝野鉄幹

です。高村光太郎が、毎月鉄幹に送ると、全く別の歌になって自分の歌とは思えないという（笑）。一番すごい添削は、「青」という字だけ残して全部違う。いくらなんでもこれはひどいと、高村光太郎は「明星」をやめる。そういう添削の在り方もあるが、茂吉はワンポイント指摘して終わり。その典型ですよ。

「私が聞いた」とあるように、講話による「講演録」ではあるが、高村光太郎が「明星」をやめた原因に、鉄幹の「添削」があるかのような言及がされていることは、掲載誌の専門性とあわせ看過できない部分がある。

安藤靖彦『日本近代詩論 高村光太郎の研究』（明治書院 平成一三年）「一 光太郎の短歌」においても、「光太郎にあつて『明星』は鉄幹の朱筆を通じて、あるいはその朱筆に対するなにがしかの抵抗という形の中で意味を持った」（同、七四頁）と、鉄幹による「添削」に、光太郎の「抵抗」のあつたことにふれられている。

さらに、「光太郎の短歌」は、以下のように説明されている。

明治三十九年二月三日、光太郎は横浜を出帆、アゼニアン号の客となった。この航海から、その後のアメリカ生活を反映した歌四十四首が翌年一月の『明星』に載る。この時の作歌以降、鉄幹の朱がほとんど収まって、光太郎の自らのものとする。（同、七八頁）

「鉄幹の朱筆」すなわち、「添削」が収まったことにより、光太郎自身の歌が確立されたとしている。

光太郎自身の回想として、大正一三年一月『明星』に載った「工房より」には、以下のようにある。^{（注19）}

与謝野先生にお見せしたら削られてしまふ歌ばかりだから、最近のを五十首ばかりだしぬけに自分が貰つた積で居る此の頁へ書き続けて置かうと考へた。詩に燃えてゐる自分も短歌を書く^{と又子供のやうにうれしくなる。}（略）（ここには短歌形式を知悉したものの自在なところ、落ち着いた自身といったものが感じられる。短歌では詩の表現の裏側に潜むかういふリアリテから進みたくなつた。

この「五十首ばかり」の作品には、「生きの身のきたなきところどこにもなく乾きてかろきこの油蟬」、「羽を彫り眼だまを彫れば木の蟬もじつと息して夕闇にはふ」があり、「短歌世界における写生、写実の風の影響ということもあるが、こうした生活にかかわる現実性ということも『蟬』一連の作には反映していよう。（略）光太郎の関心というべきものは、その目とその手（表現）とがいささかも狂うことなくかみ合つて、それぞれのリアリテを支えて確かである」^{（注20）}と評価されている。「与謝野先生にお見せしたら削られて

しまふ歌ばかり」の中に、光太郎自身の「レアリテ」を表現し得た実感のあったことが指摘されている。

一方で、鉄幹逝去の報を受けた光太郎は、以下のように追悼しているのである。^(注21)

昭和十年三月二十六日、北西の烈風ふきさすさぶ午後新聞社からの電話で、与謝野寛先生が今朝八時五十五分に長逝せられた事を知った。(略)

おもふに現代詩歌人の中で先生ほど悪意に満ちた讒謔と、意地わるく執念ぶかい排撃とを曾て受けた者はさうあるまい。新詩社創立の頃に於ける極端な人身攻撃、「明星」刊行による負債の山、短歌壇上に於ける一種の総ボイコット、此等のものは並大抵の人をへこたらずに十分な資格を備へてゐたが、先生の内^{こころ}に存する矜持の力は、能く其等のものまでも自己鍛錬の鉄敷^{てつふ}として活用するの妙機たらしめた。先生の人柄は近年に及んでまったく完成の域に達した。(略)

先生が日本詩歌界に曾てまき起した変革の性質は、ロダンがフランス彫刻界に曾てまき起した変革の真意義と相通するものがある。其は死せるものに生命の鼓動を呼びさましめ、遠いものを近くし、間接のものを直接にし、人間性の横溢をその芸術に齎^{もたら}しめて全く面目一審の実を挙げた事である。初期「明星」の所謂ロマンチズム運動がこれである。私は「明星」以前の所

謂「虎の鉄幹」時代の先生を親しく知らない。「明星」以後における先生の天才主義による斯界の鼓舞は、能く十年の絢爛な詩歌黄金時代を現前せしめた。又実際に天才晶子夫人を発見し、もりたて、誘導して、日本文学上の一奇蹟を成就したのである。先生は又実に篤学の士であつて学問に対する熱烈な欲求は、常に後進に向つて漏らされる言葉であつた。「古典全集」刊行の^(注22) 挙も亦此処に動機がある。

追悼文という文脈にもよるが、光太郎自身は「短歌壇上に於ける一種の総ボイコット」に与したのではなく、鉄幹の偉業を疑いなく賞賛している。

「高村光太郎自伝」(昭和四年)^(注22) には、以下のように自らの歩みを示している。

明治十六年三月、東京下谷に生る。東京美術学校彫刻科卒業。与謝野寛先生の新詩社に入りて短歌を学ぶ。一九〇六年より一九〇九年夏まで、紐育、倫敦、巴里等に滞在す。真に詩を書く心を得しは一九一〇年(明治四十三年)以後の事なり。一九一四年詩集「道程」出版。以後詩集無し。以上。

短文の「略歴」においても、「与謝野寛先生の新詩社に入りて短歌を学ぶ」と言及し、特に「与謝野寛先生」と敬意を示しているこ

とに注目される。後年においても、「与謝野寛、晶子の短歌」(昭和二五年)^(注23)で、以下のように答えている。

与謝野寛、与謝野晶子作の短歌中、特に愛誦されるもの、若しくは御記憶に残れるもの

大空のちりとはいかがおもおもふべきあつき涙のながるるものを
先生のこのうたが今頭に出て来ました。晶子女史のにはむろんたくさんあるのですが、今うたの言葉を思ひ出しません。(昭和二五年)

寛を「先生」と呼び、「晶子女史」ではなく寛の歌^(注24)を愛誦歌として挙げています。光太郎は寛に師事し、寛への敬意を生涯抱いていたことが思われる。それでは、寛による添削により、「明星」を脱退したかに憶測する言説は、なぜ流布したのであるうか。

光太郎が、高見順と対談した記録に、以下のように回想が述べられている。^(注25)

わが生涯

対談者 高見順／昭和三〇年一月一五日／中野アトリエにて
(略)

高見 啄木には、お会いになつてるでしょう。

高村 会つてるけれども、これはただ何気なく会つてるんで

……。あの人は編集者としてやつてたから、自然会うけどね、啄木に興味持つてどうこうつていうこと、何んにもなかった。だから知らないんですよ。あの人が病気になる前ですものね。だから、啄木の一番よくないころを知つてる。

高見 啄木は「明星」から離れていつたんですね。

高村 そう、「明星」「スバル」からね。「スバル」の編集なんかしてるのも金のためだつたらうと思うけれど。病気になる前から、あの人はうんとあの人の本領になつたわけだね、その前は才気走つた、何かオツチヨコチヨイみたいな人だつたんですよ。

高見 才が非常にキラキラしてるような……？

高村 ええ。歌でもばかに気の利いた歌を……。どうして、あと、あんなになつたか、不思議なくらいですよ。あのころのことを、さつぱり知らないですね。向うじや、近附いて来たらし
いんだけど、ほくのほうで受けなかつた。(略)

高見 あの時分(引用者注―高村光太郎が「二十四か五」の頃。渡米したのは一九〇六年)に短歌を「明星」に送つておられませんでしたか。

高村 ええ。「明星」には前からやつてたけれど、あの前のものは、自分のものと思わないんですよ。与謝野先生つていうのは、「明星」調を世の中へひろめるために、集まつた若い人の歌を根本的に直しちゃうんですよ。ほくなんか、一字だけ、自

分の書いた「白」つていう字が入つてたから、これは自分の歌か、と思うくらいで、あとはみんなちがうんだ。

高見 「明星」調にしちやうんですか。

高村 ええ。そうやつて若い人に極端な「明星」調を代表させちやうんですね。先生のは責任持った作でしょう。ほかのやつらのは構わないですよ。誰が見たつておかしいような「明星」調を、勝手にこさえちやう。それをほくならほくの名前で出さんですよ。だから、雑誌へ出た時には、自分のじやあないように思うんですけどね、名前が書いてあるでしょ、そうすると、若いから喜んで。歌がうまくなつたとか、まるで奇想天外だとか。(笑声) その代り、世の中の嘲笑の的になつたのは、みんなほくらのものであります。与謝野晶子や先生のは、立派なものなんです。ほくらは、わざと「明星」調らしいものをこさえたんです、嫌味な、ね。いま読んだら、問題にならないような歌ができていたんです。それ、みんな先生がこさえたんですよ。当時は何んにも知らないから喜んでたけれど、あとじや、これは責任が持てないから、自分の作としないんです。それはみんな棄てちやつてね。それで、船に乗つてアメリカへ行く時に、船の中で書いたんですよ。そこいらから自分のもの、先生の筆を入れないものが……、ほくのもの「明星」調といくらちがうけれども、まずいけれど、筆入れないでくれつて書いてんです。そうしたら先生も、よくよく文法のちがいはなんかは

直すけれど、先のようなひどい直し方はしなくなつた。

高見 それじや、ニューヨークから送られて「明星」にのつたのは、あなたがお作りになつたままのものですな。

高村 ええ、あの時からいくらか自分のものです。「太古の民」あれなんか船の中で書いたんです。ただ向うへ行つてからはね、朝、眼がさめて、夜、寝るまで、勉強してたんです。そうそう、イブセンに凝つちやつてね。

右の光太郎の対談による「『白』つていう字が入つてたから、これは自分の歌か、と思うくらい」という回想が、「『青』という字だけ残して全部違う」と聞き伝えられ、「明星」を光太郎が脱退したかのような事実と異なる伝聞が形成されていたことになる。光太郎は、確かに「誰が見たつておかしいような「明星」調を、勝手にこさえちやう」と批判的に回想しているが、その後、自身で「まずいけれど、筆入れないでくれつて書いた」経緯があり、以降の作品を「自分のもの」としている。

吉野秀雄は、光太郎を「高村光太郎の彫刻と詩の仕事に較べて、短歌が余技扱ひされるのも一応は止むをえない。(略)しかし高村さんは短歌の形式をひどく愛好し、断続的ながらも一生涯にわたつて作りつづけた人」^(注26)として評価し、以下のように回想している。

高村さんは明治三十三年(十八歳)美術学校在学中に歌を詠みはじめた。まづ久保猪之吉のいかづち会に入つて服部躬治に

学んだが、やがて与謝野鉄幹の新詩社に走り、創刊後間もない『明星』に、碎雨の号で作品を掲げるやうになり、かくて同誌への寄稿活動は明治四十年にまでつづいた。(略)

高村さんが自作に「責任」をもてるようになったのは、「僕がアメリカに行く船の中で拵へたもの、あの頃から後のが自分のものである。」と明言してある通り、明治三十九年(二十四歳)アゼニヤン号で渡米したその船中の作以後のものといふことになる。(略)アメリカからヨーロッパにわたった高村さんは、パリでヴェルレーヌ、ボードレル、さてはユゴー、ミュッセを耽読して大いに詩に接近し、「星と董の幼稚ロマンチズムの本来」であつた第一期『明星』の終焉はパリにゐた時分に知り、明治四十二年(二十七歳)帰国するや、たちまちパンの会のデカダンの行動と、新雑誌『スバル』のかもすネオ・ロマンチズムの気運との狂瀾怒濤の渦中に身を投ずることになり、翌四十二年には、短歌の抒情を捨てて詩の造形へと突入していった。

文学的な出発において、「いかづち会」、服部躬治に師事しながらも、「先生」として回想していたのは与謝野寛であつた。寛の「明星調」の添削に異を唱え、「つたない」ながら自身の歌を確立した経緯もあつたが、歌人としての寛に対しての敬意を生涯にわたり失うことはなかつたと言えるだろう。

四 おわりに―「師弟」関係と「添削」指導

「はじめに」でふれたように、折口信夫による「添削指導」は厳しく、全人的・絶対的なものであつた。二章、「明星」後継誌・「冬柏」同人の添削原稿に見られたように、結社における選歌・添削による指導は、自身の歌として機関誌に公表することが通例であつた。また、三章で論じた高村光太郎のように、結社の「歌風」による「添削」の加わつた歌は、「自分のもの」ではないと主張し、自らの歌を確立しようとした例もある。一方で、寛を生涯「先生」と呼ぶような師弟関係が継続されていたことも、興味深い事例である。「明星」が終刊となつた背景には、北原白秋・吉井勇らによる新詩社脱退があつたが、光太郎はこれに与していない。^(注27)

前稿において詳述した与謝野晶子「歌に志す婦人に」の所収されている『短歌作法講座』(改造社、昭和一年)は、石井直三郎・斎藤茂吉・北原白秋・川田順・尾上柴舟・前田夕暮らが執筆している。散文においても、この時期、「文章論」が実践をともし生成されていた。

文章論は昭和初期から戦後にかけて多く書かれた。(略)作家自身が文章について教育的に語る――それはある意味、明治

以降から歩んできた日本の近代文学の歴史が一巡したことを示していると言える。達成があったという自覚がそれを促しているのである。

文章論に反映された文章観は、作家たち自身の文学への理解と思想をよく明かす。それは当然歴史的なものであるが、同時に我々にとつての良い文章をどう考えるか、という問いかけともまっすぐつながっている。文芸創作教育の場においては、近代文学者の文章論は最も近い先達にはかならない。^{〔注8〕}

冒頭、現代短歌の有り様と、本稿の詳らかにしようとする近代歌人の「添削」指導との隔絶についてふれたが、「文芸創作教育の場」において、近代歌人の「歌論」が、「先達」となり得ることを信じ、この稿を継続する。

次稿においては、斎藤茂吉による添削、鹿兒島寿蔵『齋藤茂吉の添削と批評 石川確治歌集「山澤集」原本による』（短歌新聞社昭和六二年）等も参照し、与謝野寛・晶子以外の歌人の「添削」指導のあり方について言及することを予定している。

注

1 前稿「短歌「添削」指導考(二)——『名家添削 短歌作法』(昭和一年)における与謝野晶子の「添削」——」(『就実論叢』第五一

号 二〇二二年二月) 一〜三頁。

2 注1 同、一〇頁。

3 加藤守雄『わが師 折口信夫』(朝日文庫 一九九一年) 四五〜四六頁。同書は、「昭和四二年六月に文藝春秋から発行された」。

4 注3 同、四七頁。

5 鈴木淳三『短歌上達の手引き』(本阿弥書店 平成一九年) 八〜九頁、前稿「短歌「添削」指導考(一)——「添削」指導の現在、与謝野晶子「歌の添削」(昭和六年五月) 他——」(『就実論叢』第四九号 二〇二〇年二月) 二〜三頁で言及。

6 「木下龍也(歌人)」
https://www.mbs.jp/jounetsu/2022/10_02.shtml

「情熱大陸 MBS 毎日放送」<https://www.mbs.jp/jounetsu/>
参照 2022-10-24

7 木下龍也『天才による凡人のための短歌教室』(ナナロク社 二〇二〇年)、(電子書籍Kindleによる参照、「第1章 歌人になる」[すべては歌集に書かれてある。])

8 注5 前稿同、二頁、「一 現在の「添削」指導——「宗匠制」忌避と「結社」」

9 令和相聞歌実行委員「恋人の聖地 宇多津町 令和相聞歌」
<https://www.reiwasounonka.com/> 参照 2022-10-25

10 堺市博物館編『明星』創刊120年・『冬柏』創刊90年記念 企画展パンフレット『冬柏』——『明星』の精神を貫いた理想郷——(堺

- 市博物館、令和二年二月五日）四〇～四一頁。
- 11 こがねい・きみこ（こがねゐ・）【小金井喜美子】〔1870～1956〕
翻訳家・小説家。島根の生まれ。本名、キミ。森鷗外の妹で、小金
井良精（こがねいよしきよ）の妻。レールモントフの「浴泉記」の
翻訳で知られる。著「森鷗外の系族」「鷗外の思ひ出」など。「こが
ねい・きみこ」【小金井喜美子】、デジタル大辞泉、JapanKnowledge、
<https://japanknowledge.com>、（参照 2021-10-25）
- 12 注10同、四〇頁。図版より原稿の文字を起こし、「m」字状の
三重丸」は、本稿では◎で示した。
- 13 丹羽安喜子への晶子の添削原稿・書簡については、以下に所蔵、
影印・翻刻が公開されている。
関西学院大学図書館「与謝野晶子による丹羽安喜子短歌草稿へ
の添削」
<https://library.kwansei.ac.jp/archives/tanka/tankah.htm>
参照 2021-10-25
- 14 拙稿「資料紹介 堺市博物館蔵『与謝野寛添削 小日山直登歌
稿 無題（青き絹）』翻刻・解題」（『近代文学資料研究』第3号
近代文学資料研究会 二〇二〇年三月）六五～七三頁。
- 15 注10同、四二頁、「さまざまな『冬柏』の弟子と同人たち 政
治家・官僚」
- 16 注14 同、七一頁。
- 17 注3 同、四六～四七頁。
- 18 注5 前稿同、一二～一三頁、「現代歌人協会公開講座 ザ・
巨匠の添削。～添削から探る歌人の技と短歌観～第一回『斎藤茂吉』
小池光 司会・石川美南」（『歌壇』第三二巻二二号 本阿弥書店
平成三〇年七月 七二～八三頁）
- 19 安藤靖彦『日本近代詩論 高村光太郎の研究』（明治書院 平
成一三年）「一 光太郎の短歌」八三頁。
- 20 注19同、八三～八四頁。
- 21 『高村光太郎全集』第八巻（昭和三三年、筑摩書房）二五九～
二六〇頁、「本巻には、文学、言語等に関する評論、序跋等一二六
篇を収録した」、「与謝野晶子歌集『白桜集』序」昭和一七年九月
改造社刊、尚、同月『冬柏』にも掲載された。（同、四一五頁）
- 22 『高村光太郎全集』第十一巻（昭和三三年、筑摩書房）「本巻に
は、短歌、俳句、雑纂、対談、散文補遺を併せ収録した」（同巻、
四二二頁）、「高村光太郎自伝」昭和四年一〇月新潮社刊『現代詩
人全集9』に掲載された。（同巻、四四三頁）
- 23 注22 同巻、四四一頁。昭和二五年八月『スバル』に発表され
た。
- 24 大空の塵とはいかが思ふべき熱き涙のながるるものを
（与謝野寛『相聞』明治書院 明治四三年／『鉄幹晶子全集』4
勉強出版 平成一五年）一一一頁。
- 25 注22同巻、三三四～三三三頁。「わが生涯」昭和三一年一月『文
藝』に「その頃を語る」と題して掲載されたが、昭和三二年七月

中央公論社刊高見順『対談現代文壇史』に収録された。後者には若干の加筆があるので、これを底本とし、表題もこれに従った。」(同巻、四四六頁)

26 吉野秀雄「高村光太郎の短歌」(『高村光太郎全集』第十一巻月報17 昭和三十三年八月 筑摩書房) 二頁。

27 「新詩社も、明治四一年鉄幹にたいする白秋らの不満に基づく内紛のため、また自然主義の時代思潮のため、この年一月には「明星」を廃刊」、『新詩社・日本近代文学大事典、JapanKnowledge、<https://japanknowledge.com>。(参照 2022-10-24)

28 小林敦子「宇野浩二『文章の研究』と純文学の思想」(『就実表現文化』16号 就実大学表現文化学会、二〇二二年一月) 四七～六四頁。なお、同稿も研究課題「多分野における創作教育の指導法の比較と改善に向けた基礎的研究」(左記)の研究成果である。

本稿は、二〇一九年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究C)研究課題名「多分野における創作教育の指導法の比較と改善に向けた基礎的研究」(課題番号19K00236 二〇一九～二〇二二年度、二〇二二年度に研究期間延長)による研究成果である。同課題において稿者は、「文芸(短歌創作)分野での実践研究」を分担している。